

研究者であるが、そのBlosが提唱した思春期の諸段階の概念を示す。

I. Blosの思春期分類

Blosは、10歳頃に子どもはもはや潜伏期とはいえない心性が出現するとして「プレアドレッセンス」という段階(表1参照)を設定した。いわば真のアドレッセンスへの導入期というわけであるが、もはや潜伏期の学童ではないという意味で、この段階はすでに思春期の領域に踏み込んだ段階であると理解してよいと筆者は考える。13歳頃に子どもはアドレッセンスの早期を意味する「前期アドレッセンス」に踏み込み、その段階は15歳頃まで持続するとBlosは指摘している。それに続く16歳頃から18歳にかけての時期は、Blosが本来のアドレッセンス、すなわちアドレッセンスらしいアドレッセンスという意味を込めて、「固有のアドレッセンス」と呼んだ年代であるが、ここでは前後の段階の呼称との均衡を考慮して「中期アドレッセンス」と呼んでおきたい。その後、19歳から22歳頃までの「後期アドレッセンス」と、23歳頃に始まりその後のどこかで終了となる「ポストアドレッセンス」を経て、アドレッセンスは終了するとBlosはしているが、アドレッセンスとは終わりなく我々成人の心に潜

在し続けるものであり、きっかけさえあればアドレッセンス心性は一過性に、しかし確かに再現してくるものであるらしい。だとすればアドレッセンスという時期はオープンエンドのものであり、人間の内面にあつて、いつまでもある程度の影響力を發揮し続けるものであるらしい。

ここでは、わが国で日常的に用いられる「思春期」という言葉が曖昧に示している年代である10歳から15歳、すなわちプレアドレッセンスと前期アドレッセンスの年代の心性をBlosの概念を中心にいま少し検討しておきたい。

II. 潜伏期からプレアドレッセンスの到来まで

アドレッセンスを理解するためには潜伏期の意義をよく理解していなければならない。Blosは幼児期とアドレッセンスという心の発達をめぐるとの激動期をつなぐ架け橋として潜伏期を規定している。

Blosは、「潜伏期の間に、価値と重要性の感情を与えてくれる両親の保障への依存は、客観的で社会的に是認されるような成就と熟達による自尊心の感覚へと次第に交代していく。……自我機能は退行に対する抵抗力をますます身につけ、……知覚、学習、記憶、思考といった重要な自我活動が葛藤外の自我領域でいっそうしつかりと強化される」(原文54頁)と潜伏期の意義を規定した。

潜在期は、単に幼児期葛藤がいったん影を潜めるという意味で名づけられた用語ではあるが、幼児期的葛藤が目立たないか否かという問題には議論が多く、実際この時期にも神経症性疾患は稀ならず存在する。潜伏期を葛藤の質と量という側面から見ると、潜伏期の前半は通過したばかりの幼児期由来の葛藤の余韻を引きずっており、また潜伏期後半はそこまで近づいてきた思春期の葛藤の影響を受け始めており、潜伏

表1 思春期の諸相

(1)	Preadolescence (プレアドレッセンス)	10歳～12歳
(2)	Early Adolescence (前期アドレッセンス)	13歳～15歳
(3)	Adolescence Proper (中期アドレッセンス)	16歳～18歳
(4)	Late Adolescence (後期アドレッセンス)	19歳～22歳
(5)	Postadolescence (ポストアドレッセンス)	23歳～open ended

Blos, P.¹⁾より改変

シンボジウム

期という段階は、幼児期と思春期を結びわめて中間的・過渡的な年代と理解しておくのが妥当であろう。

潜伏期の最も特異的な特性は、自我機能の拡大と発展であり、Blosが言うような葛藤外自我領域にある諸自我機能（Blosは知覚、学習、記憶、思考を挙げている）を中心とする自我機能全体の強化なくして健全な思春期の幕開けはありえないと理解しておいてよいだろう。もちろんBlosの用いた葛藤外自我領域 the conflict-free sphere of the egoの自我機能という概念は、Hartmann, H.が「一次的自律的自我機能 primary autonomy」と呼んだ体質的、遺伝的な基盤に発する知覚、思考、言語、記憶、運動機能、知能などの自律的自我機能とほぼ同義と考えてよいだろう。

Blosは、「前思春期の間、本能圧力の量的増大は、人生の早期には役立つことのできた満足のリビドー的様式や攻撃的様式の全てにみさかひのない充当をもたらす（原文57頁）」と、10歳過ぎにプレアドレッセンスが開始するやいなや出現する新たな事態について記載した。これは、初潮や精通へ向けて体格と身体機能（運動機能と内分泌器などの内蔵機能）の目覚ましい発達が生じるプレアドレッセンスの子どもの内面で、いったい何が生じているのかを適格に示唆した表現といえることができるだろう。

プレアドレッセンスに入り、質的・量的な身体発達が加速され、運動機能と内蔵機能からなる身体機能が急速に成熟し始めると、身体的エネルギーと心的な衝動エネルギーはともに増大していく。その急速に増大するエネルギーが流れ込む先は、プレアドレッセンスでは新たな対象や新たな活動であるよりは、むしろ幼児期の対象選択に従った過去の対象であり、幼児期に経験してきた諸活動である。したがって、プレアドレッセンスが開始してまず賦活される攻撃性を含んだ衝動は、幼児期のそれと同質のもの

であり、その結果強まる葛藤もまた幼児期に経験した葛藤と同質である場合が多いはずである。

プレアドレッセンスの葛藤がある面で非常に危機的であるとすれば、このような「幼児的衝動と葛藤の再現」と呼ぶべき状況が内面で急激に拡大していく事態を、この段階の子どもはすでに親の体格や迫力に近づいた存在（ときにはすでに追いついた存在）として経験しなければならないことにあるのではないだろうか。

III. 衝動増大へのプレアドレッセンス的対処

「直接的な本能の満足は超自我の不承認に出会う（原文59頁）」とBlosがいうように、口唇期からエディプス期までの幼児的衝動や攻撃性の増大は、幼児期を通過してきた証（あかし）ないしは成果ともいうべき超自我の強い禁止を受けることになる。そのため、「この葛藤下で自我は、たとえば抑圧、反動形成、置き換えなどの防衛を復活し強化する……」（原文59頁）」というBlosの言葉のように、各種の幼児期由来の防衛機制が賦活されることになる。それはたとえば「このことは、子どもが仲間の承認や仲間の中の感信を維持する技術と興味を発達させ、不安を縛りつけておくために多くの過補償行動や強迫行為や強迫思考にふけらせる（原文59頁）」といった状態を現出させる。

確かに、私たち精神科医は、プレアドレッセンスの段階に至ると、急速に強迫性障害をはじめとするさまざまな神経症性疾患の発現数が増加してくるという実感を持っている。そればかりではなく、統合失調症の顕在発症ががぜん増加し始めのもこの段階からである。まさにそれは、プレアドレッセンスに出現する前述のような特異的な心性と、破瓜期へ向けて各種身体機能のバランスに急激な変化が生じることがあいまって生じてくる、プレアドレッセンスという年代の持つある種の脆弱性、もしくは

過敏性を反映しているといっただろう。そしてその脆弱性・過敏性の本態は、プレアドレッセンスには「肛門期」を中心とする、あるいは、Mahler, M. S. 風にいえば「再接近期 *rapprochement subphase*」を中心とする幼児期心性への部分的退行が生じることにあると理解してよいことを Bloss は教えてくれた。これは後に述べる理由で男子により典型的に生じるようである。

プレアドレッセンスにおいてこのような幼児的攻撃性や衝動の増大が生じ、幼児期由来の防衛機制が賦活されている状況、すなわち幼児期への部分的退行が生じているということは、いわば古い皮袋（幼児期心性）に新しいワイン（プレアドレッセンス心性）を入れる事態が生じてしまっていることに他ならない。退行だけで対処するにはプレアドレッセンス心性のうねりは強大すぎるのである。しかし幸いにも、10 年余におよぶ脳と自我の発達、そして積み重ねた経験が織り出した多くの知恵は、子どもをもはや幼児とはいえない存在に成長させている。

このプレアドレッセンスの子どもが持つ新たな防衛手段ないしは新たな対処法 *coping strategy* を Bloss は「罪の社会化 *socialization of guilt*」という概念で規定した。すなわち、「集団一般に、あるいはもっと正確に言えば違反行為の扇動者たるリーダーに罪の重みを託して楽になる（原文 59 頁）」ために、プレアドレッセンスの子どもは仲間集団を形成するというわけである。

さらに Bloss は「罪悪感が共有されたり投影されるという現象は、この時期に集団に加入する意義が増大する主な理由の一つである（原文 59 頁）」と強調している。これは現代の感覚で言えば、母親像から離れはじめた子どもの見捨てられ孤立無援であると感じる一種の抑うつ感、それに由来する無力感と空虚感、さらには罪悪

感と自尊感情の低下、これらのプレアドレッセンス特有な心理的苦痛をひとまず受容し、回避させてくれるサポート・システムとしての機能がプレアドレッセンスの仲間集団の存在意義であるということになるのではなかろうか。

IV. プレアドレッセンスの様態をめぐる男女差

Bloss は「少年と少女はそれぞれ異なったやり方で破瓜期の衝動増大に対処するため、前性器的衝動の復活は男女で同じようなあらわれ方はしない（原文 58 頁）」として、プレアドレッセンスの発現とその進行には男女差が大きいと指摘している。以下ではエディプス期の葛藤、性器体制への経路、行動および仲間集団の様式という 3 種類の観点からその男女差について Bloss の見解をまとめてみたい（表 2 参照）。

1. エディプス期の葛藤の推移（表 2, a）

プレアドレッセンスの男女差はその前史ともいえる幼児期経過の男女差と深い関連を持っており、特に関連の深いエディプス期をめぐる男女の違いについて、Bloss は概ね次のように指摘している。

男子において男根期の到来とともに増大してきたエディプス葛藤（父親を母親への愛着をめぐるライバルとして意識すること）は、圧倒的に強大な父親と小さくて幼い自分という父子の物理的関係性から直接派生するエディプスの去勢不安の圧力によって決定的に衰微し、逆にエディプスのライバルである父親像を取り入れ、「お父さんのような男になりたい」といった愛着を伴った同一化と理想化を妥協的な防衛手段とすることでエディプスの願望とそれをめぐる葛藤を押さえ込むのが一般的なエディプス期の経過である。

これに対して女子は男根期の到来とともに、母親への依存を中核とする前性器性に対する大

シンポジウム

表2 Blos, P.¹⁾ が記載したプレアドレッセンス心性の特徴

	男子	女子
a) エディプス期の葛藤の推移	エディプス葛藤は去勢不安により決定的に衰微し、父親の同一化・理想化へ向う	前性器期性の大規模な抑圧が生じる；エディプス葛藤は男子のように衰微することなく持続する
b) 性器体制への経路	性器体制に向かうに、前性器期衝動の充当、去勢不安との格闘を経る；退行は顕在的に生じる	男子よりはるかに力強く、かつ決定的に異性愛へと向かう；退行は防衛され不顕性である
c) 行動の典型様式	人間関係を確立しようとするよりは、むしろ不安を否認する	前性器的母親への愛着に退行せず、能動的男根的母親像に同一化した行動が優勢となる（おてんば）
d) 仲間集団の形・機能	冒険仲間；集団化；前エディプス的去勢不安の同性愛的防衛	秘密を共有するひそひそ話の仲間

規模な抑圧が生じると Blos が指摘しているように、女子は前エディプスの母親像への愛着を抑圧し、むしろ前エディプスの母親像、特にその男根的母親像 phallic mother に同一化することでエディプス葛藤に対処しようとする。そのため少女では、エディプス期に入ってもエディプス葛藤が男子のような徹底的な抑圧を受けずに持続している。それは、エディプス期の女子が母親の目を盗んで行なう父親への愛着の表明や、男根を持っているという幻想と持っていないという現実の間を揺れ動く心性に見て取ることができる。

このような男女における幼児期の終結様式の相違が、プレアドレッセンスにおける両者の様態の相違と関連してくるという Blos の指摘は妥当なものといえるだろう。

2. 性器体制への経路をめぐって (表2, b)

Blos に従えば、プレアドレッセンスを通じて男子はエディプス葛藤の再現と直面することになるが、そのような性器体制に向かう前に、男子は前性器的な衝動の充当とその結果生じる前エディプス的去勢不安（すなわち男根的・太古的母親に対する去勢不安）との格闘を経由

しなければならない。その葛藤に対応するため、男子の幼児期心性への部分的退行は、女子に比べ非常に明確な形で顕在化することが多い。

一方、女子は、前性器期性の徹底した抑圧を経由したということ（一方でエディプス心性はいくぶんなりとも意識しながらすごしてきたということ）を前提として、プレアドレッセンスでも幼児期心性への退行は男子ほど顕在的には生じず、Blos の表現によれば逆に「(男子より) はるかに容易に、力強く、異性に向う (原文 61 頁)」という。

3. 行動の典型様式、および仲間集団の形と機能 (表2, c, d)

プレアドレッセンスにおいて、男子は人間関係を確立しようとするよりは、むしろ不安を否認することを直接に志向する活動が優勢であると Blos は指摘している。すなわち、男子の仲間関係は、大胆な行動への挑戦といった不安・恐怖に立ち向かう「冒険仲間 companion-in-adventure (原文 77 頁)」をめざして集団化するという特性を持っている。その際の彼らは排他的で、均質であろうとし、不安を掻き立てるような異端の存在をけっして容認しない。まさ

に前エディプス的・太古的母親像由来の去勢不安に対抗するに同性愛的防衛を持ってする仲間集団というわけである。

それに対して女子の行動は、男子に見られる前性器的母親への愛着へ退行することなく、むしろ幼児期にそうであったように「前エディプス期的母親を愛情対象とせず、一時的に能動的男根的な母親像へ同一化しようとする（原文70頁）」のである。その結果、プレアドレッセンスの女子は一般に能動的かつ活動的なお転婆であろうとし、女子の友人関係は「秘密を共有するひそひそ話の仲間 the secret-sharing whispering partner（原文77頁）」という形をとることになるとBlosは指摘している。

V. プレアドレッセンス心性と環境の相互作用

以上Blosの記述を中心にプレアドレッセンス心性の概略を示してきたが、少しBlosから離れて、子どもと環境の関連について検討してみたい。図1は、子どもの自我と家族システムおよび外界との関係性を図示した模式図である²⁾。子どもは家族システムにより生み出され、そこで育まれ、本能の命じるままに外界へと家族システムから分離していきこうとする存在である。その子どもが顔を出していく外界とは、学校社会や仲間集団、あるいは地域社会などであ

り、真の外界へ向かう前に必要な経験と発達の機会を供給してくれる中間的・過渡的な外界である。さらに、子どもの「自我ego」というシステムは、内部に無意識的、本能的、かつ身体的な世界、すなわちより自動的で反射的なシステムを内包しており、それをここでは古典的な精神分析用語にならって「イドid」という用語で呼んでおきたい。

このように子どもの自我は、家族システムと、中間的・過渡的外界と、そして自らの内なるイドの世界という三種類の環境に取り巻かれた存在と考えることができる。子どもの自我は、この三種類の環境から心理的・身体的圧力（これは「ストレス」と呼んでもよい）と支援をともに受けている存在である。さらに子どもの自我は、外界のストレスが高まれば家族システムからの支援を求め、家族内の葛藤が高まれば中間的・媒介的外界の支援を求めるといふほど自動化された心理的安定機構を持っており、このホメオスタシスが保たれているときに、子どもの成長が保障されているといえる。

しかし、プレアドレッセンスという年代は、それまでの潜伏期と異なり、このような外界への前進運動を葛藤少なく進めることができない年代である。内面ではこれまで述べてきたようなダイナミックな心の動きが続いているものの、家族システムを離れ外界へ向かうという方向性を持つ心の成長運動がプレアドレッセンスでは急激にとらえがたくなり、表面的には発達運動が停止しているように見えてしまう。いや正確には、激しいエネルギーを孕んだ細かな前進・後退運動を繰り返しながら、遠目にはあたかもそこに停止しているかのように見える。これがプレアドレッセンスの子ども自我と環境の布置の特徴である。牛島³⁾がWinnicott, D. W.の青年期ドルドラムの概念にならって「前青年期ドルドラム」と概念化したのは、子どもが母親像から分離を開始したプレアドレッセンスに顕

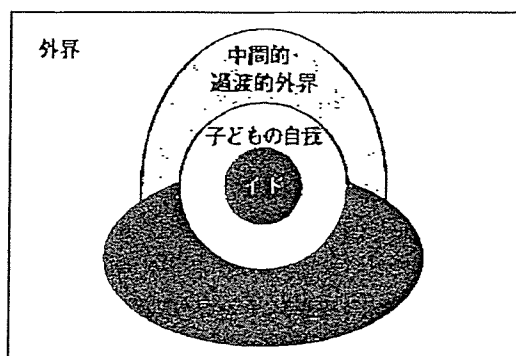


図1 子どもの自我と環境の布置

シンポジウム

在化させる。母親像をめぐる反抗（すなわち分離・独立への入れ込み）と依存（すなわち過敏な見捨てられ感の出現）の両価性が充進し、「進むもならず、退くもならず」となっている心理的状况についてである。牛島は、子どもがこのようなドルドラム（無風帯）を乗り越える格闘を支援する存在として「前エディプ斯的父親」に注目した。Blosは“On Adolescence”をあらわした後、主に1960年代から70年代にかけて、この前エディプ斯的父親像についての考察をさかに行なっている。

VI. 前期アドレッセンスの心性

Blosに従えば、前期アドレッセンスの特性はブレアドレッセンスまで優勢であった母親像へのこだわり（筆者は「マザー・コンシャス」と呼んできた）に対する明確な決別、すなわち「近親相姦的愛情対象からの脱充当（原文75頁）」に取り組むことにある。対象充当の撤退は自動的に超自我の効力を弱めていく。一方近親相姦的愛情対象である親から分離した子どもの自我は不毛となり、子どもはそれを「空虚感 a feeling of void（原文76頁）」として体験するとBlosはいう。そうした超自我の弱体化と空虚感に対応するために、前期アドレッセンスの子どもは「“友人”へと向う（原文77頁）」ことを選択する。この仲間関係はもはやブレアドレッセンスの男子でBlosが「冒険仲間（原文77頁）」と呼んだ仲間関係ではなく、前期アドレッセンスにおける対象選択はいまや「自己愛的モデル（原文77頁）」を求めるものであり、仲間関係はそうしたモデルを供給しあう仲間集団なのである。

この自己愛的モデルは「自我理想 ego ideal（原文77頁）」と呼ばれており、前期アドレッセンスはまさに自我理想の形成をもたらす年代といえよう。このような前期アドレッセンスの心性は、Blosの記述が男子により典型的に

あらわれるように筆者には感じられるので、ここではまず男子の仲間関係についてBlosの“On Adolescence”における記述を追ってみたい。

1. 前期アドレッセンス男子の心性と仲間集団

Blosに従うなら、男子のこの時期の交友は自我理想をめぐる自己愛的対象選択であり、そこには同性愛的心性が介在するであろうことは想像に難くない。まさに男子は、ブレアドレッセンスと前期アドレッセンスにおける各々内容の異なる二つの同性愛的対象選択優勢な時期を経て、外界へ非近親相姦的・非同性愛的対象選択を求めることが可能になっていくのではないだろうか。その第一の同性愛期であるブレアドレッセンスには、高まった前性器性に基づく不安（その典型的なものは前エディプ斯的・太古的母親像由来の去勢不安）を回避する手段として、ギャングと呼ばれる加盟メンバーの画一性・均一性を追及する同性愛的仲間集団によるバカ騒ぎ的・冒険的な活動に没頭するという現象が現れる。まさに、質的に均一な同性の仲間集団への愛着と没頭によって、母親からの分離に起因する見捨てられ感や、分離が必然的に伴う罪悪感由来の去勢不安に耐えようというわけである。

一方、前期アドレッセンスの男子で優勢な同性愛性とは、Blosによれば自己愛的な対象選択それ自体をあらわしており、幼児期後半のエディプス期が衰退するときに理想化した父親との同一化を通じて超自我を強化したように、ここでは理想化された同性愛的な友人に同一化し内在化させた自我理想によって超自我の衰微に退行しようとする。この点に関してBlosは以下のように記載した。

「少年の自我理想の形成においては、以前、エディプス期が衰微するときに父親との同一化

を通じて超自我を強化した過程が繰り返されるようである。どちらの場合も、人生に新しい方向と意味を与える統制的な力が確立される。同時に、この力は自己評価の維持（自己愛的な均衡）を調整することができる。幼児の誇大妄想は、親の否定しがたい特権的な地位と力によって粉碎される。その残存物は超自我に受け継がれ、それゆえに超自我は親の「壮さ」を分かち合う。子どもが両親の一部である限りにおいて、子どもに完全性の感覚を許していた幼児期の誇大妄想は、前期アドレッセンスには自我理想によって受け継がれる（原文 78 頁）。

このようにして前期アドレッセンスの男子は自我理想としての友人を求めて仲間集団を形成するのである。しかし、実際には仲間集団のプレアドレッセンス的特性と前期アドレッセンスのそれは、Blos の記載ほどクリア・カットに区別できるものではない。前期アドレッセンス段階に入っても、男子が作る多くの仲間集団はプレアドレッセンス的ギャングの特性を保持しているものであり、ギャング的な仲間集団が徐々にギャング性を薄めていき、かわって自我理想を投影しあう同性愛的対象選択という質が濃厚になってくるという、二つの色のグラデーション的移行経過となるのが一般的であろう。

2. 前期アドレッセンス女子の心性と交友

女子の前期アドレッセンスにおける友人関係の質が男子のそれとは異なるものであることを Blos は強調している。Blos は「少女は、少年の発達と近い平行関係は示さない。確かに、交友は少女の生活において同様に重要な役割を果たす。女子にとって同性の友人がいないことは、彼女を渇きにも似た絶望に投げ込み、友人を失うことは抑うつと生活への興味の喪失を促進する（原文 82 頁）」と記載し、さらに「女子の理想化の典型的な雛形は“夢中”である。女子では性愛化された愛着は男性・女性の両者に及

ぶが、女性との関係においてのみ、それは混じり物のない形であられる。選ばれた対象は親との多少部分的な類似点があるか、あるいは著しい相違点を持っている（原文 82 頁）」と続けている。この時期の女子がまるで来るべき異性との恋愛の予行演習のように同性の友人との関係、たいていは「二人組」的な友人関係であるが、これに入れ込み、この友人関係が壊れたときには残された側の女子がしばしば不登校に陥ったり、激しい愁嘆場を演じることはきわめて一般的な出来事である。注目すべきはこのような対象選択が男性にも及ぶにしても、傍から見ると「恋愛」を直接に連想させるような性愛化された入れ込みぶり、Blos のいう「夢中 crush」は、受動的役割を受け持つ関係性も容認できるという関係であり、同性の対象選択においてのみ純粋に出現するものであることは Blos の指摘のとおりであろう。また、前期アドレッセンスの女子が選んだ対象は親との部分的類似点があるか、あるいは著しく相違しているかであると Blos が述べたように、同時期の男子の同性愛的な「自我理想」とはいくぶん質を異にする対象選択、すなわち異性愛的対象選択の中間的・過渡的な予行演習という文脈から理解できる側面が見て取れる。

3. 前期アドレッセンス女子の「両性性」について

上記のような女子の前期アドレッセンス心性は、男子の「同性愛性」に対して、私は男の子か？ 女の子か？ という考えにとられる「両性性」と理解すべきであると Blos は主張した。そして「前期アドレッセンスの少女の両性的な態勢は自己愛の問題と関連している。思春期では自己愛的対象選択が優勢である。他方、中期アドレッセンスの間には自己愛的な防衛が拡大する。幻想上のベニスは自己愛の枯渇から少女を守るために心的現実として維持されるが、

シンポジウム

少年と互角であることは依然として生死の問題である (原文 86 頁)」と前期アドレッセンスの女子の葛藤の特性について論じている。

この時期の女子は、未だ前エディプス的・太古的な母親像、すなわち幻のベニスを持った男根的母亲像への同一化によって万能的な自己愛を保持することができるという心性にとどまっておき、受動性の持つ創造的な側面を受容した女性性を確立していく中期アドレッセンス以降の発達準備段階にあるといえよう。

したがって、この時期の女子の異性に対する姿勢は、あくまで男根的な能動性に彩られたものとなるのである。前期アドレッセンスの女子は、受動性を大幅に受け入れねばならぬ現実的な女性性を受容すべき時の近づく足音に対抗するかのように、さまざまな能動的存在に次々と同一化する「代理によって生きるための顕著な能力、すなわち試行としての一時的な同一化をもたらし能力 (原文 86 頁)」を見せてくれると Blos は指摘するとともに、それゆえに時として女子を準備なしの早すぎる性交という行動化へ接近させることがあると警告している。

こうした危険と隣り合わせの前期アドレッセンスの女子を守ってくれるのは「交友、夢中、空想、知的興味、体育活動、身だしなみへの没頭 (原文 87 頁)」であるという指摘につづけて、Blos は「少女が正常に前期アドレッセンスを通過するための最高の防御は両親、特に母親、もしくはそれに代わる人物の情緒的供給である (原文 87 頁)」という重要な指摘をしている。プレアドレッセンスから前期アドレッセンスの終結まで一貫して、母親による男根的でない、すなわち能動的でありすぎない情緒的な受容と支持こそ、女子を最も力強く支えているのである。まさに、何気なく近づいてきた娘と何気ない世間話ができ、娘の愚痴を批判や性急すぎる行動なしに聞いてくれる母親に支えられて前期アドレッセンスを過ごすことのでき

る娘は幸いである。女子のこうした両性性が減衰しはじめると、それはすでに中期アドレッセンスが開始しているサインなのであると Blos は指摘している。

VII. 前期アドレッセンス心性と環境

ここでは、前章までのような Blos のプレアドレッセンスおよび前期アドレッセンスの諸概念を筆者なりに応用して、この時期の子どもの自我の危機の様態について述べてみたい。

図 1 でプレアドレッセンスの子どもの自我と環境の布置を模式図として示したが、前期アドレッセンスの布置は自我がプレアドレッセント・ドルドラムを通過し、再び外界への前進運動を顕在化させる段階として理解してよいだろう。その前進を支えるために中間的・媒介的な外界である学校や仲間集団による支えがより一層重要になるが、そのためにはそれら外界での活動や人間関係に適応ないし成功することが必須である。したがって前期アドレッセンスの子どもは多かれ少なかれ無理をした過剰適応の傾向を示すものである。当然このことが外界でのストレスに対する過敏性・脆弱性を高めることになる。

その一方で、前期アドレッセンスの子どもの家族システムへの依存度は減少し、家族への大幅な依存は本能的な禁止にあうのが普通である。以下ではプレアドレッセンスおよび前期アドレッセンスの子どもの心の危機の様態を三種類に分類して検討した。

1. ストレスと緊張の高まり

図 2 で示すように、外界での仲間関係を含む人間関係や、学業をはじめとする外界での活動における挫折、周囲の人間やその活動の迫力に圧倒された結果としての萎縮、あるいは仲間集団からの孤立といった外界でのストレスが急速に高まる状況が生じたり、両親の不和をはじ

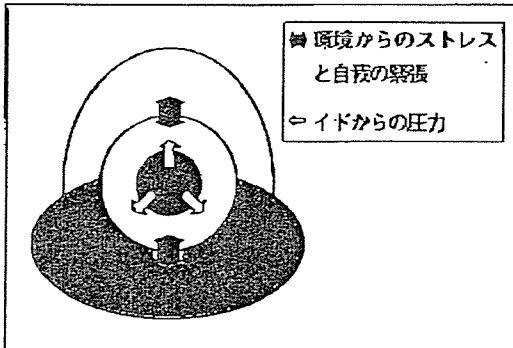


図2 危機の様態(1)ストレスと緊張の高まり

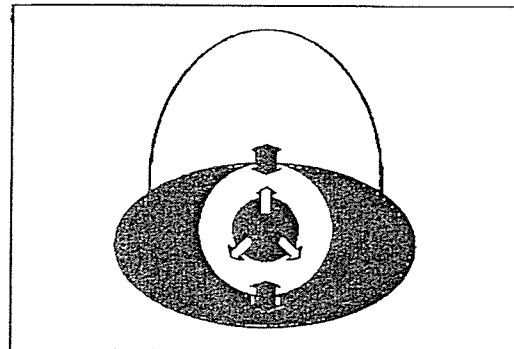


図3 危機の様態(2)社会的ひきこもり

めとする家族システム内の葛藤が高まった状況の発現は、プレアドレッセンスおよび前期アドレッセンスの子どものイドに属する攻撃性をはじめとする内的衝動を賦活し、その結果として内的葛藤を強め、主観的には環境との関係における緊張感を亢進させる。

また、こうした外界や家族システムのストレスの増強がなくても、プレアドレッセンスや前期アドレッセンスの発達段階特有な内的葛藤が悪循環的に強まり持続するような事態は、子どもの成長を支える自我と環境のホメオスタシスを崩し、外界や家族システムへの子どもの適応力を弱める。このような苦痛に満ちた病理的な布置のもとで、身体化症状、各種の不安、強迫症状、拒食・過食などの多くの神経症性症状形成や、自己破壊的あるいは他害的な問題行動による行動化、あるいは関係念慮などの精神病症状が発現してくるものと思われる。

しかし、この時期の子どもはこの苦痛からすぐさま外界を回避し家族システムへのひきこもりへと動き始めるわけではなく、むしろそのまま現在の布置にとどまろうとする強い傾向が存在する。この状態にとどまる間に、家族システムや中間的外界からの心理的支援が適切に提供されるならば、あるいは凌いでいる間に自身の内面で何らかの自我機能の発達が生じてくるならば、この葛藤状況を通過できることを本能が

教えているのかもしれない。

2. 社会的ひきこもり

図3に示した自我と環境の布置は、子どもがついに図2の状況にとどまることができなくなり、家族システムの中へと退却した状況を意味しているもので、いわゆる社会的ひきこもり状況を表している。もちろんこの布置への移行は、直接には外界からのストレスを減少させることを目標に行なわれるわけであるが、この変化によって得られた心の平安は一瞬のものにすぎない。本来支援システムであった外界、自己実現につながり自尊心を育むはずであった外界から一人孤立してしまったという思いを伴う、母親に近づきすぎたこの新たな布置は、前エディプ的な去勢不安やエディプ的な父親の罰への恐れをはじめとするこの年代の子ども特有な激しい葛藤を刺激する。

その結果、ひきこもり状況の中でもやはり不安や強迫をはじめとするさまざまな神経症性症状や、家庭内暴力や社会的回避などの問題行動が悪化もしくは新たに現れる。同時にひきこもり状況にある子どもは、この時期の通常のそれをはるかにしのぐ広範かつ強度の幼児期心性への退行を示すことが多い。この退行は男子の場合には、前エディプ的母親像への愛着と暴君的支配という両価的姿勢を示す一方で、エド

シンポジウム

イプスの父親の怒りによる報復を恐れて父親を回避するというあらわれかたをするであろうし、女子なら前エディプスの母親像への同一化の悪循環的失敗の姿として、母親を暴力的に支配しようとする一方で、内面的にはこの強大な前エディプスの・男根的母親像に屈服して母親に固着し、結果的に病的状態にとどまることで母親の自己愛のために奉仕し続けるというあらわれ方をする。こうした病理的な方法を通じて子どもの側も太古的・万能的な自己愛を保持しようとしているのである。

3. 擬似家族システムへの接近

前期アドレッセンス以降の子どもや青年には以上の二通りの危機の他に第三の危機の形が存在する。それは図4に示したような「擬似家族システム」に接近し所属することで、前期アドレッセンスや中期アドレッセンス特有な葛藤を解決しようとする方策である。これは、帰るべき（すなわち、ひきこもることのできる）家族システムの機能に障害があり、危機を家族システムへの退却によって表現できない子どもに生じるものが一般的であるが、前期アドレッセンス以降のある局面で、家族システムには問題がなくても、子どもがたまたま家族システムへ退却することに非常に強い抵抗を感じる段階に合わせた場合にも生じるものである。

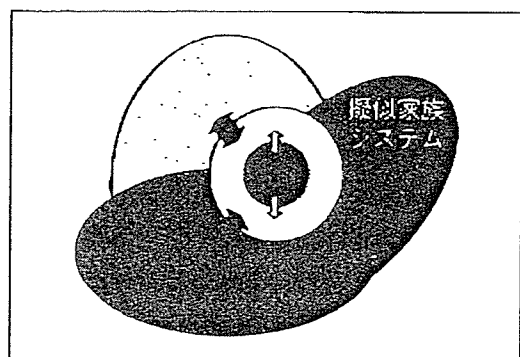


図4 危機の様態(3)擬似家族システムへの接近

擬似家族システムに所属すると、子どもはそれによって強力に支えられるが、擬似家族システムに所属することは親や担当する教師の自己評価を著しく脅かすため、しばしば学校や家族との激しい対立が発生することになる。しかし子どもは、擬似家族システムに支えられることによって、図に示したように内的にはひとまず葛藤が沈静するのを感じることができる。この擬似家族システムとしては、非行集団や犯罪組織、そしてカルト的宗教集団や政治団体などが代表的であるが、女子に見られる性非行にも擬似家族的なかりそめの温もりを求める心性が濃厚に感じられる場合が多い。擬似家族システムはこうした否定的な集団や現象ばかりではなく、フリースクールのような健全な居場所や自助組織、あるいは治療、特に入院治療もまた強力な擬似家族システムなのである。プレアドレッセンスや前期アドレッセンス以降の子どもには、このような肯定的な擬似家族システムによる支援なしに葛藤や人間関係の悪循環を停止できない場合が稀ならず存在することを忘れてはならない。

おわりに

ここまでBlosのプレアドレッセンスと前期アドレッセンスに関する“On Adolescence”中の記述を中心に考察を進めて来た。すでに述べてきたようにBlos的観点は思春期の子どもの心の病理を理解する上で、そして治療・支援の方法と姿勢を組み立てる上で、たくさんのヒントを与えてくれるという実感を筆者は臨床経験の中で持っている。しかし、Blosが観察し考察したアドレッセンスとは半世紀前の米国の子どものアドレッセンスに他ならない。果たして現在の子供達にもBlosのアドレッセンス論は通用するのだろうか。私はその問いには迷わず「Yes」と答えたい。しかしそう答えるには、いくつか現代のアドレッセンスの特徴に関

表3 現在のプレアドレッセンスと
前期アドレッセンスの特徴

(1)	仲間集団・友人関係の意義の低下
(2)	社会的価値観の相対化
(3)	多様化の一方での画一化と無力感
(4)	幼児期の親の受容機能の貧困化と 相補的親子共生関係の遷延化
(5)	“ひきこもり”への抵抗感の減少

する見解を表明する必要があるだろう。

表3は筆者が現代のアドレッセンスの特徴と考える諸点を上げたリストである。このリストが示唆する現代の若者の特性は、仲間集団への愛着が明らかに以前より低下し、社会的価値の相対化によって真に没頭できる目標を奪われて白けており、早くから成功者と失敗者の二分化が進み、そのため成功者も失敗者も深い怒りを貯め、母親も働く豊かな社会の中で忙しく働く母親への幼児期の過剰適応の経験を多くが持っており、その結果ともいえる万能的自己愛を相補的に備給しあう強い母子の結びつきが思春期まで遷延しがちである、といったところであろうか。

かくして、アドレッセンス年代に至った子どもや青年の家族システムへのひきこもりは以前よりずっと容易に選択できる選択肢となったのであり、プレアドレッセンスや前期アドレッセンスの年代に至って、これ以上良い子の過剰適応を続けることができないという悲鳴を、精神症状や問題行動で表現している子どもも確実に増加してきた。このような現代のアドレッセンスの子どもの心性を理解し、支え、癒すためにBlos的観点は今でも十分に強力で生産的な指針であると筆者は考えている。そして、アドレッセンスの精神医学や心理学などを学ぼうとす

る者はBlosの理論を知らずには済ますことができないだろう。Blosのアドレッセンス論には、現代の若者の特性に合わせて若干の修正を加える必要があることを頑なに否定するつもりは筆者にはないが、アドレッセンス全体をかくもダイナミックな一連の流れとしてとらえ、しかもその中に明らかな共通の特性を持つ相期を見出し段階化して見せたBlosの豊かな思考とセンスには学ぶべき点が多々あると考えている。なお、この論文をBlosの“On Adolescence”をわが国に紹介した功労者であり、筆者を児童思春期精神医学へとその初歩から導いてくださったとともに、その醍醐味を伝授してくださった今は亡き師・野澤栄司先生に捧げる。

追記

本論文中に引用した“On Adolescence”中の文章の日本語訳は、野沢訳の誠信書房版が長く絶版状態にあり入手不可能なことから、時代を経て、現代の日本語表現にそぐわない点も見られるため、筆者が同僚らと独自にその一部を翻訳した日本語訳のほうを用いた。そのため文中で示した引用頁はすべてFree Press版の原文の頁である。

文 献

- 1) Blos P: On Adolescence. The Free Press of Glencoe Inc., New York, 1962. 野澤栄司訳: 青年期の精神医学. 誠信書房, 東京, 1971.
- 2) 齊藤万比古: 児童精神科医からの学校への提言. 思春期青年期精神医学, 10(1):21-31, 2000.
- 3) 牛島定信, 福井 敏: 対象関係からみた最近の青年の精神病理—前青年期トルドラマと前エディプス的父親の創造—. 青年の精神病理2 (小此木啓吾編), pp.87-114, 弘文堂, 東京, 1980.

シンポジウム

DEVELOPMENT TO INDIVIDUAL THROUGH PREOCCUPATION WITH GROUP
ACTIVITY DURING THE PRECEDING PART OF ADOLESCENCE

KAZUHIKO SAITO

(National Center of Neurology and Psychiatry)

Abstract : In this paper, I traced the Blos' thought, which was described in "ON ADOLESCENCE (1962)", about psychological growth during adolescent period, especially the preceding part of it, in order to reconsider psychosocial traits of modern Japanese adolescents. I focused discussion mainly on quality of "group activity" in preadolescence and early adolescence and its differences between boys and girls. I also discussed transition of ambivalence and narcissism during adolescence. Blos taught us that mind and behavior of adolescent should be understood as the outcome of dynamic interactions between adolescent and environment, such as family, school, friends and community. In conclusion, I believe that Blos' theory of adolescent psychological growth doesn't become old-fashioned yet and is providing us with sufficiently fruitful ideas to establish a therapeutic relationship with adolescent.

Key words : *preadolescence, early adolescence, group, Blos, ambivalence*

I. 総論：現状

思春期のこころの発達とその問題

さいとう かず ひ こ
齊藤万比古

国立精神・神経センター精神保健研究所児童・思春期精神保健部

要旨

思春期のメンタルヘルスにかかわるにしろ、身体疾患の治療にあたるにしろ、思春期のこころの発達に関する知識をもっていることの重要性は、臨床家なら誰でも実感しているところである。

本稿では、まず臨床家が思春期の子どもにかかわるときに、戸惑いを感じる思春期心性の特性について概観する。さらに思春期が、おおむね10歳過ぎ頃に始まり20代半ばまで続く期間であるとすれば、その15年間を「思春期心性」と一括りにすることにはいささか無理があると思われるので、その期間をいくつかの段階ないし位相に分けて理解することにし、P. Blosの思春期論に示されている思春期の諸段階について述べる。このような思春期の状態についての検討に続いて、思春期のメンタルな症状や精神疾患のとりえかたに関する筆者の考えを概説する。

Key Words

adolescence

正常発達

精神疾患

はじめに

思春期の子どもには独特なとりえがたさと、扱いにくさがあるという意味で、思春期心性はある種の神秘性を伴って受けとめられてきた。子どものメンタルヘルスに関心があっても、思春期の子どもの扱いにくさ、交流のむずかしさ、支援の届かなさを理由に、思春期の子どもにはかかわりたくないと思っている専門家が昔から多かったのではないだろうか。

筆者は、四半世紀にわたって児童思春期の精神医療にかかわってきた児童精神科医として、こうした思春期心性の受けとめがたさを克服する一助となるような光を当ててみたいと考えて、この難題に取り組もうとしている。

思春期のこころの発達とは何か

思春期のこころの発達を考える際に忘れてならないことは、第一に、人間のこころの発達とはけっして直線グラフ的な経過で進むものではなく、発達過程のいくつかの節目で、必ず足踏み状態に見える発達停滞を示す複雑な曲線グラフ的発達過程をたどるということである。しかも停滞を示している時期こそ、後から振り返れば、それ自体大切な発達課題に取り組んでいた段階であり、同時に次に来る発達加速期の準備

段階であったとわかるという特徴がある。そして、こうした発達の停滞がある程度優勢になる年代の代表的なものの一つが思春期である。もちろんこの発達停滞には健康な範囲のものから病的なものまで大きな幅があり、健全なものとされる停滞は、つねに部分的な水準にとどまっている。

心得ておくべき二点目は、思春期の子どもには幼児期の心性の再現（すなわち発達退行）が部分的に生じているということである。思春期の子どもにとらえがたさは、年齢相応の大人びた言動と、幼児的な甘えの欲求や自己中心性が同居する、いわば「大きななりをした幼児」という特性によるところが大きいのではなかろうか。もちろん発達停滞と同じように発達退行も、その健全な範囲はあくまで部分的退行であり、全面的で長期間続くような過度の幼児返りは基本的に病的と考えるべきである。思春期における健全な範囲の発達退行で出現する幼児期心性は、主として2～3歳あたりの心性、すなわちフロイト流に言えば肛門期心性であり、マラー流に言えば「再接近危機¹⁾」的な心性である。その他に、4～6歳くらいの時期のエディプス期的心性や、0～1歳過ぎくらいまでの口唇期的な心性も混入してくるとされる。その2～3歳頃の再接近危機的心性の特徴は何かというと、自分の願望や衝動へのコントロールをめぐる、そして母親への愛着をめぐる非常に矛盾した両価性にある。したがって、思春期の子どももまたきわめて両価性が高いという特徴をもっている。さらに、口唇期心性はミルクを求める欲求と関連した貪欲さの出現と、そしてその出現に対する過剰なおそれが思春期心性に混入してくることで気づかれ、エディプス期心性は母親への愛着の増大に関連して目立ってくる、父親に対する回避傾向として現れる。

心得ておくべき三点目は、こうした発達退行が親と同じ迫力や体力をもつようになって経験

せねばならないということにある。幼児期心性の再現はたとえ部分的なものであっても、もしも親子の関係性におけるアンバランスが存在する場合（たとえば男子におけるエディプス的父親の不在、女子における受容的母親の不在など）、それは、悪循環的に思春期の子どもを幼児期心性の優勢な状況に追い詰めていく可能性があるということをおぼえてはならない。いわんや、幼児期心性が優勢なまま小学校低学年（力動精神医学的には“潜在期”とよぶ）を過ごした子ども、すなわち幼児期におけるある種の葛藤がまったく未解決のまま、発達のエネルギー傾斜に従って、屋上屋を重ねてきた子ども（被虐待児がその典型であろう）の場合には、思春期の親と同等の力をもって、幼児期心性の優勢な状況にあるという心理的布置は、あまりに辛い状況となるのである。しかし大半の子どもの場合には、親子の関係性が大きな崩れを示すことなく思春期を通過していくことができ、その間に親に支えられながら、親離れを果すという矛盾に満ちた発達課題に取り組んでいけることを忘れてはならない。そして親は子どもが向け続ける両価性によく耐え、両親像からの独立に向けた子どもの思春期発達を支えることができているのである。

心得ておくべき四点目は、思春期の子どもは幼児と異なり、10年に及ぶ脳を含んだ身体発達と実体験の積み重ねの結果、外界の支持機能を親離れの支えに利用できる力を自我機能として具有するということである。親から離れ始めるとき、子どもは親から見捨てられ、無力なままポツンと世界に立たされているという思い（それは“見捨てられ抑うつ”とよばれる）を多かれ少なかれ禁じえない。だから初期思春期の子どもは“ギャング”とよばれるような一体感を追求する画一的仲間集団を作りたがるのであり、親もしくはそれに替わる大人に対して、「近く（甘える）」と「遠ざかる（自己主張する）」

という情緒的行動をめぐってきわめて両価的なのである。しかし、この外界での関係性を利用して親離れに耐えるという方策は、文字どおり諸刃の剣であることを忘れてはならない。この方策は必然的に外界での過剰適応を生むことになり、過剰適応は失敗への感受性を過度に高めることで、外界での失敗の過大評価を生みやすく、小さな失敗が決定的な挫折となりうるのである。こうしたある種の過敏性や脆弱性には個人差も大きいが、思春期という年代の心性そのものがもつ特性でもあること、すなわち誰にでもおこりえるものであることを忘れてはならない。

そして第五点として、思春期の子どもの特異な自己愛性をあげておきたい。親離れに始まる子どもの自立過程の到達目標は、「自らの存在を自身で支えて歩むことができている世界」であるが、そのことを達成するまでの道（すなわち思春期）はけっしてなだらかではない。その期間の相対的に過敏で傷つきやすいところを支える機能を担うものの一つが自己愛性の高まりである。もちろん従来いわれてきたように、子どもの自己愛性をもっとも顕著な特性として顕在化するのは10代の後半部分の年代である。しかし、10歳過ぎのどこかの時点で思春期が開始したとき、おそらくそれと機を一にして、子どもの自己愛性が亢進し始めるのである。親離れの進行により促進される仲間集団への入れ込みは、当初はメンバーの質が同一であることによる一体感に支えられた孤立感の防衛という意義が大きい。その後徐々に仲間のある種の資質を理想として同一化しようとする結びつきへと発展していく。そのような仲間集団との関係性の発達を支えるものの一つは、高まりつつある自己愛の存在です。このような思春期前半（10～14歳ほど）の自己愛性の特徴は、ヨチヨチ歩きの幼児が母親からはなれて探索行動に没頭しているときの万能感に根をもつものである。したがって、その年代の幼児が親から離れすぎた

ことに気づいたり、親の不在に気づくときの無力感と落ち込みを経験するのと同じように、思春期前半の子どもも仲間集団で孤立したり、失敗をして自己愛を傷つけられると強い無力感や空虚感を感じ、分離不安が急激に高まって母親のもとに駆けもどる行動に出る。すなわち、外界で傷ついた自己愛を母親との一体感に基づく幼児的な自己愛性に退行して防衛しようとする傾向がみられるのである。これに対して、思春期後半（15～19歳ほど）の自己愛性は、より母親から分離した状況で、“同一性の確立”，すなわち“自分探し・自分作り”という発達課題に正面から取り組む年代となった子どもにとっての、自己の独立性が完全なものであるか否かという点をめぐる過敏性として現れる傾向がある。自らの思考や行動がオリジナリティをもつ自己固有のものであるか、他者に自己の意思を統制されていないか、自分の固有な内面を他者は容易に知りうるのではないかといった自己感のゆらぎも、この年代の子どもにとってはけっして病理的とばかりはいえない一般的な経験である。その結果、自分の隠しておきたい部分も含め他者に注目されているのではないかという感覚が、この年代の子どもの他者との関係性を特徴づけるものとなるのである。

以上、5点にわたって思春期のころの特徴を述べてきた。実際には、こうした年代特有な特徴と子どもの個人的要因とを混合したものが、個々の子どもの思春期心性ということになる。また、こうした特徴が悪循環的に肥大ないし過剰化したところに、思春期心性の病理が発生してくるものと思われる。

思春期の諸相

発達段階としての思春期心性の経過を説明する考えかたは、思春期を一つの段階（phase）として扱うものから、いくつかの下位段階（sub-

表1 思春期の諸相 (文献2) より引用, 改変)

(1) Preadolescence (前思春期)	10歳～12歳
(2) Early Adolescence (思春期前期)	13歳～15歳
(3) Adolescence Proper (固有の思春期, 思春期中期)	16歳～18歳
(4) Late Adolescence (思春期後期)	19歳～22歳
(5) Postadolescence (後思春期)	23歳～open ended

phase) に分けて考えるものまで諸家によりさまざまであるが, ここでは, 後者の観点を示した Peter Blos の思春期論にしたがって述べてみたい。なお, ここでは青年期とか青春期などといった類語の混用による混乱を避けるため, “思春期” という日本語を “adolescence” という英単語に対応する唯一の訳語として取り扱っておきたい。Blos は, 思春期を10歳頃に始まり20代半ばのどこかで終了する, およそ15年間にわたる期間と考え, 表1のような5種類の下位段階に分類することを提案した²⁾。

1. 前思春期

Blos は10歳頃, もはや潜伏期 (力動精神医学でいうおよそ6歳から9歳にかけての年代) とはいえない新たな心性が出現するとして, それを “前思春期” とよんだ。これは, いわば真の思春期への導入期と規定されているが, もはや潜伏期ではないという意味で, 思春期全体の第一段階と考えてよいだろう。母親離れが開始し, すでに述べた, 退行的な幼児期心性の部分的再現が生じてくることで知られる年代である。心性として母親離れを意味する自己主張や反抗が目立つ一方で, 「マザー・コンシャス」とでもよぶべき母親への甘えや要求の増大, あるいは「母親が冷たい」と感じる “見捨てられ体験” への過敏性の亢進が同時的に生じてくるという, きわめて両面的な心性が特徴的な年代である。こうした年代特異的な危機的心性を一貫して支えるこの年代の仲間関係は, “gang” とよばれるメンバーの均一な質を追求する傾向の著しい集団を形成する特徴をもっている。この

ギャング的な仲間集団の特徴は, 毛色の変った仲間に対してきわめて苛烈な拒否反応を示すところにある。この心性こそ, いわゆる “いじめ” の重要な背景要因の一つである。

2. 思春期前期

中学生に入学する前後の時期にあたる13歳頃になると, 多くの子どもは思春期の早期を意味する “思春期前期” とよばれる段階に入っていく, 15歳頃までその段階特異的な心性が持続すると Blos は主張している。この年代の特徴は前思春期の心性を継承しながら, 母親離れがより一層進んだことによる仲間関係の質の変化が特徴的な段階である。前思春期では, まだまだ親と子どもの関係性には幼児期・児童期的な大人・子ども間関係性が優勢であるのに対して, 思春期前期の子どもは第二性徴が進行し, 体格も大人に匹敵するようになるため, 母親への前思春期的なこだわりは, エディプス的な感情をめぐる葛藤を強め, より一層母親離れを進行させる必要に迫られる。そのため家庭外の人間関係に以前にも増して入れ込むようになり, 友人や教師といった家庭外関係性を理想化することで親の価値切り下げを進めていこうとする。この年代の仲間関係は, 理想化された関係性を追求する傾向があり, 忠誠を誓う仲間といった形で親離れの進んだ無力感を防衛しようとする仲間集団といえよう。そこでは仲間集団の利害が何よりも優先され, 自分自身の願望は二の次とされることが普通であるように, 基本的にこの段階の子どもは「グループ・コンシャス」であり, 仲間からの孤立に敏感である。その結果,

こうした仲間関係において重大な挫折や孤立を経験すると、恐れていたはずの前思春期的な心性への退行を生じ、学校や仲間集団を回避して母親への関心の優勢な家族内関係へとひきこもっていくか、あるいは家族的な関係性を提供する家族外の“擬似家族システム”へと接近していくという事態が生じやすいという矛盾をこの段階の子どもは背負っている。なお、この擬似家族システムは、学校内のたとえば親友関係や部活動での緊密な関係性や、メンタルな問題を扱う治療・相談機関でのセラピスト・クライアント関係が提供できるものでもあるが、非行集団、性非行を媒介する風俗業を含めたアウトロー集団、カルト的な宗教集団や政治集団などが、そのような関係性を餌にこの年代の子どもたちをひきつけていることも忘れてはならない。

3. 思春期中期

思春期前期に続く16歳頃から18歳にかけての時期は、Blosが思春期発達の山場をなすもっとも思春期心性の際立つ段階という意味で“固有の思春期”とよんだ段階であるが、ここでは、前後のつながりがよい“思春期中期”を使っておきたい。この段階のもっとも重要な特徴は、もはや逆もどりできないくらい親離れが進行し、自己の確立に向けた諸課題が目白押しであるということにある。すなわちこの段階はきわめて自己愛性が高まり、その結果、他者の自己への影響に非常に敏感になり、危機が高まれば容易に自己への引きこもりを選択する「セルフ・コンシャス」な面こそ思春期中期心性の特性である。この段階を通じて男女とも性同一性の確立が進行し、親対象からの分離が十分進んだことの反映として、家族外の異性に性愛化された愛着対象を求めることが可能となり、さかんに恋愛行動が出現することが知られている。この段階の仲間関係は、自己の個別性が損なわれるほど仲間集団を優先するグループ・コンシャス性は薄れ、むしろ個々の理想や思想の優秀性や独

自性を主張しあえる集団が求められる。異なる考えや姿勢を認め合えるこの個別性の確立は、仲間集団の構成メンバーが個々の自己同一性を確立していることが前提に生じうる特性であり、人がその能力をいつ完全に獲得しうるかは決めがたいオープン・エンドな発達課題といえる。したがって、実は思春期中期以降の仲間集団においても、しばしば仲間の原理が個の利害に優先される場面が生じうるが、その際も、たとえば宗教集団の教理、政治集団の思想や理念といった上位概念をうまく適応しないかぎり、構成メンバーがこの年代の高い自己愛性にかなう形で個の願望を抑えることはない。

4. 思春期後期

19歳以降、子どもは19歳から22歳頃までの“思春期後期”と、23歳頃に始まり20代後半のどこかで終る“後思春期”を経て、思春期という特有な年代を通過する。これらの時期は16歳以降の「自分探し・自分作り」の作業の完成期であり、自己同一性がほぼ確立し、職業生活や結婚も視野に入った社会参加の予行演習が進む段階である。こうして15年間を越える思春期という段階を通過して、はじめて人は“大人”とよばれることになる。この大人になるということは、おおむね以下のような能力を獲得したことを意味しているのではないだろうか。①幼児期の願望をめぐる葛藤に由来する両親への愛着、罪悪感、怒り、憎しみといった感情が過剰ではなく、内的な両親像から自由に存在し、自己決定できる。②同性の親が示してきた態度や姿勢に対して感情的に折り合える。すなわち同性の親に対する反感やライバル意識、あるいは過度の理想化、恐れといった感情を克服している。③自分の衝動を統制できなかつたり、あるいは逆に、衝動を統制できないのではないかと過度に恐れたりすることがない。④孤独に耐えられると同時に、他者と親密な関係を結び維持することができる。⑤異性への関心が必要十分にあ

り、異性に関する正しい理解をもっている。
⑥受動性・能動性をめぐる社会的役割や性役割を受け入れることの葛藤を克服している。すなわち受動性と能動性を程よく調和させて発揮することができており、社会的活動や異性との関係、あるいは子育てなどにおける受動的役割を受け入れることができる。⑦社会的活動の場と役割を得ることができ、もしくはそのための準備中であり、経済的自立の見通しをもつことができる。

現代の思春期の時代的特性

以上のような思春期の特徴やその発達過程は、時代を越えた普遍的な部分と、時代的な傾向が色濃く反映される部分からなっている。そのため、当然ながら現代の思春期を理解するためには一定の修正が必要になる³⁾。筆者は、すでにこの観点から4点の特徴をあげて、現代の思春期像の特性を記載したことがあるが、ここであらためてその点について述べてみたい。

思春期心性の特性としてこれまで、思春期発達を支えるシステムであるとともに、この時期の子どもの最大の挫折要因でもある仲間集団、ないし友人との関係の重要性についてくり返し述べてきたが、はたして現代の思春期の子どものとって、仲間集団や友人は以前と同じような意義をもっているのだろうか。少なくとも現代の思春期の子どもは、個性が以前よりずっと優先された価値体系の中に生きており、女性の社会進出と少子化の奔流のような進行の中で、際立ってきた母親・子ども間における互いの自己愛の幼児期的相補性が思春期まで弱まることなく持続する傾向ともあいまって、仲間集団の意義はかなり低下していると言わざるをえない。現在では、社会的な挫折体験をはじめとする外界でのストレスの増大は、自己愛が相補的に支持される母親との幼児的關係性に、思春期の子

どもを容易に退行させるようである。

また、現代社会が子ども文化にもたらしたさまざまな影響の中で忘れてならないことは、社会的価値観の相対化が社会のあらゆる領域にいきわたってきたという状況である。社会的な権威者は、その裏面をたちまち暴かれてその権威を失墜するという、日々周囲で繰り返される価値観相対化のエピソードが、テレビを中心とするマスコミ報道を通じて、幼い頃から子どもの目の前で展開している。両親像に関しても事情はまったく同じである。すなわち情報という面では、子どもは大人とほとんど変ることのない情報を幼い頃から目の当たりにしており、同一化したり取り入れたりするための対象が、きわめて不安定なままでの自己形成を強いられている。現代の子どもに色濃い、信じるもののない「シラケ」の根の一つはここにあるようである。

現在、子どもの生きかたの選択肢は多様になったとよくいわれるが、はたしてそうだろうか。筆者には多様化の一方で厳として存在する画一化が感じられてならない。すなわち現代の子どもは、学業成績や運動能力や歌唱力などといった物差しによって、実際には早くから「成功者（勝ち組）」と「落ちこぼれ（負け組）」に選別されてしまっている。その結果、負け組となった多くの子どもは、強い挫折感と無力感による「シラケ」を抱いて思春期に至るのである。一方、勝ち組とされる子どもは、大人の指示に従って、つねに走り続けることを求められており、いつ自分が挫折し「落ちこぼれるか」という不安を抱えて、苛立ちながら思春期に至るのである。現代の子どもの突然爆発する怒りと攻撃性の背景には、ただ「我慢ができない」という水準ではなく、思春期の子どものこのような深い怒りや絶望感が存在しないと誰が言えるだろうか。

以上のような現代の思春期像の特徴を考察す

る際に忘れてならないことは、それが現代の家族像と深くかかわっているということである。母親が就労することが当然となった現代社会にあって、乳幼児期の子どもは母親の社会活動の妨害とならないような過剰適応を本能的に行っている。いわば基本的な欲求を「我慢」することが、乳幼児期の一般的な適応姿勢であることは、あまり触れられることのない現代育児事情の特徴といえる。過剰適応した「よい子」を自己の能力の証明として勲章のように誇りに思い、その子どものために心をくだき金銭を注ぐ親と、逃げ帰れば子どもの傷をわが傷として怒り外界を攻撃してくれる親であることを知っている子どもは、幼児的な自己愛の相補性を解消できないまま思春期に入っていくことになる。ところが思春期という年代は、本能的な親離れの圧力が強まり、子どもを家庭から社会へと大きく踏み出させようとする。その奔流の中で、子どもは自己愛を打ち砕かれ、幼児的な自己愛の再編・修正を迫られる機会に次々と出会うことになる。そのような場合に自己愛的傾向のとくに強い子どもは、幼いときと同じように親のもとに逃げ帰って、親の庇護の元に自己愛を回復させようとする（不登校・ひきこもり状態の心性の一側面である）。あるいはまたその段階で、もはやそれ以上幼児期以来の「よい子」を続けることができなくなり、それまで自己愛の相補性と引き換えに我慢してきた基本的欲求をめぐる諸症状を表してくることがある（拒食症、巻き込み型強迫などの心性である）。

こうした幼児的な関係性を解消できない親子関係とは別に、次のような親子関係を忘れてはならないだろう。すなわち、さまざまな理由でわが子に関心をもてない親や、幼い子どもの養育に両価性を強く刺激される被虐待体験をもつ親は、子どもに対する無条件の保護や情緒的没頭といった、乳幼児期の子どもが自己肯定感を得るうえで必須のかかわりを実行することがむず

かしい。そのために親が養育を放棄したり、子どもを身体的、あるいは心理的に攻撃したりするような事態に陥ると、子どもは早い段階から深いところの傷を受けることになってしまう。虐待は極端な場合であるにしても、多かれ少なかれこのような内容の関係性をもった親子が増加しているというのも、また現代の特徴といえよう。

思春期のこころの障害について

表2に示したリストは、思春期の子どもに見出すことが多いメンタルな問題に関連した症状と疾患のリストである。思春期を含めた子どもは、ストレスの増大による内的葛藤の高まりを言語（すなわち精神症状）よりは、身体の生理的変化（すなわち身体症状）や行動（すなわち問題行動）を通じて表現する傾向があると言われてきた。実際、子どもがこころの中で増大する違和感や進行している危機を、もっとも敏感に、そしてもっとも早期に表現するのは腹痛、頭痛、めまい、嘔気といった不定愁訴であり、以前からもっていた機能性の疾患やアレルギー疾患の唐突な増悪である。こうした症状を示す子どもは“心身症”と診断されることが多いが、身体症状を次々と訴えたり、重大な身体疾患であると思いついておられるような場合には“身体表現性障害”に含まれる疾患である可能性がある。

精神症状としては、さまざまな不安や恐怖、強迫症状、転換・解離症状、離人症状、抑うつ症状、精神病症状などが代表的なものといえよう。不安・恐怖には表2に示したような予期不安、分離不安、パニック発作などが思春期には一般的であるが、過度の内気さや、他者の視線に対する過敏さなどの対人恐怖的な症状も含まれる。対人恐怖にはさらに、自分の視線や臭いが他者に不快感を与えているといった、修正不可能な信念をもつに至る自己視線恐怖や自己臭恐

表2 思春期のこころの症状と疾患

症状の種類 (おもな症状)	代表的な疾患
1. 不定愁訴, 身体疾患の増悪 (腹痛, 気管支喘息 etc.)	身体表現性障害, 心身症
2. 不安・恐怖 (分離不安, 予期不安, パニック発作 etc.)	全般性不安障害, パニック障害, PTSD
3. 対人恐怖 (不登校・ひきこもり, 視線恐怖 etc.)	社会不安障害, 妄想性障害
4. 強迫症状 (不潔恐怖, 洗手強迫, 確認強迫 etc.)	強迫性障害
5. 転換・解離症状, 離人症状	転換性障害, 解離性障害
6. 抑うつ症状 (無気力, 悲哀, 自己否定, 自殺願望 etc.)	大うつ病性障害, 気分変調性障害
7. 問題行動	
a. 自己に向う攻撃性 (自傷行為, 拒食, 過食 etc.)	摂食障害, 境界性人格障害
b. 家族に向う攻撃性 (反抗, 家庭内暴力 etc.)	反抗挑戦性障害
c. 社会へ向う攻撃性 (反抗, 非行, 少年犯罪 etc.)	反抗挑戦性障害, 行為障害
8. 精神病症状 (自我障害, 幻覚・妄想, 躁状態 etc.)	統合失調症, 双極性気分障害

怖とよばれる症状も含まれるが、この症状が背景に立つのは思春期前期移行の子どもであり、“妄想性障害”と診断される。強迫症状も前思春期に入る頃からよく見ることのできる症状であるが、思春期の“強迫性障害”の多くは、母親を儀式に巻き込んだ不潔恐怖が主症状である。転換症状とはこころの葛藤が身体症状に置き換えられて現れる疾患で、朦朧状態や記憶喪失などの解離症状とともに、以前はヒステリー症状と一括りにされていたものである。多重人格は解離症状の特殊形とされている。また離人症状は「自己」という実感があいまいになる症状を意味しており、“離人症”は思春期中期以降に見出されることが多い疾患である。抑うつ症状は、無気力になる、悲哀感が増し涙もろくなる、希望を失う、死にたくなるといった症状であり、思春期でもけっしてまれなものではない。しかし思春期の子どものうつ状態は“大うつ病性障害”であるよりは、“抑うつ気分を伴う適応障害”や“気分変調症”である場合のほうがずっと多い。さらに精神病症状であるが、急性の精神運動興奮状態や錯乱状態のような激しい表現も含まれるが、自分の考えが他者へ漏れていく、自分の思考や行動が他者にコントロールされているといった自我障害も、幻聴や被害妄想などとともに精神病症状の一種である。

問題行動はしばしば重要な精神疾患のサインであり、こころを病む子どもの救難信号でもある。筆者は概念を具体的に整理するという観点から、問題行動を表2で示したような3下位分類に分けている。その第一グループは“自己へ向かう攻撃性”と理解できるもので、筆者は手首自傷、薬物乱用、拒食、過食、女子の性非行などをこれに含めるべきと考える。この自己へ向かう攻撃性をもたらす問題行動は、いずれも自己破壊的行動と理解できる一方で、自傷行為を含めどこか快感を追求してやまない耽溺的、依存的な側面をもっているところに特徴がある。第二グループは“家族に向かう攻撃性”で、子どもから家族への反抗や家庭内暴力がこれにあたる。家庭内暴力はそれだけが生じているもの、不登校に伴うもの、強迫儀式への巻き込みから始まるものなどが考えられる。家庭内暴力は母親との退行した共生関係において、亢進した両価性が原動力であると思われる。反抗は、そこまでの退行状態には至っていない段階で、両価性の命ずるままに甘えたり逆らったりを繰り返して内的な危機をアピールしている姿と理解できないだろうか。第三グループは“学校・社会へ向かう攻撃性”で、これは学校および地域社会の特定の人物や状況に対する反抗や、それがもっと拡大した非行、あるいは少年犯罪を意味